

【報告(研修)】

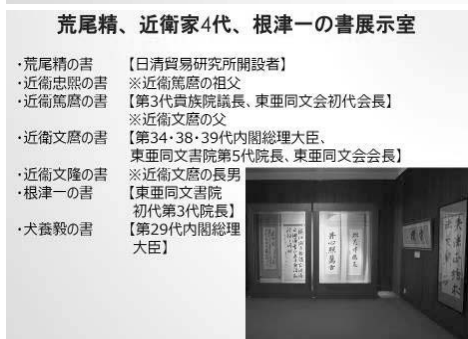
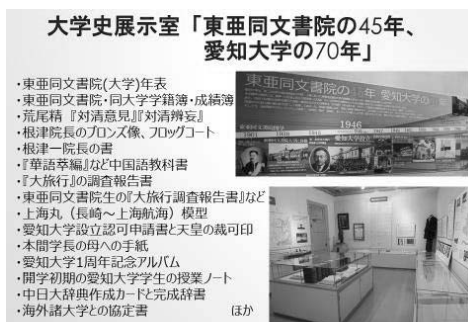
愛知大学事務職員全体研修会「大学記念館と本学大学史の変遷」

愛知大学豊橋研究支援課長 田辺勝巳

(2018年8月28日、豊橋校舎316教室)

2018年度愛知大学事務職員全体研修会が、8月28日(火)10:00~16:00豊橋校舎にて開催されました。本学誕生の地、豊橋校舎での開催であることから、大学記念館の見学時間を30分程度いただくよう調整した結果、了承を得ることができました。そこで、大学記念館見学前に全体研修会会場にてPPT資料(下記掲載)と、パンフレット『愛知大学記念館』および『「東亜同文書院」「愛知大学」創成の軌跡』をもとに15分程度、簡単な大学史紹介を致しました。

なお、パンフレット『「東亜同文書院」「愛知大学」創成の軌跡』は、藤田佳久名誉教授に執筆を依頼し、レイアウト等デザインは私が担当し刊行しました。東亜同文書院から愛知大学に継承される大学史を、時代背景をもとにまとめたものです。



### 中部地方産業研究所 ガラ紡展示室



### 総合郷土研究所 特別展示室



### 「東亜同文書院」が本学のルーツ校 ①

愛知大学は、東亜同文書院の『成績簿』『学籍簿』を保管している。

東亜同文書院最後の学長・本間喜一の指示により、上海から帰国時に、教職員・学生が日本にすべて持ち帰り、現在も豊橋教務課にて保管している。



→『「東亜同文書院」「愛知大学」創成の軌跡』・1901に掲載

### 「大学史」を基軸にブランディング ①

「大学史」を基軸として、研究面では「東亜同文書院大学記念センター」を中心とする研究を、教育面では「大学史」に関わる講義等の提供を、公開事業としては「大学記念館」を中心とした取り組みを行っている。さらに、本学を知ってもらう対象を在学生だけでなく、小・中学生から卒業生、一般の方々と捉え、「大学史」を中心に本学を知ってもらうための公開事業を行い、大学ブランドアップに繋げる展開をしている。

### 「東亜同文書院」が本学のルーツ校 ②-1

東亜同文書院最後の学長・本間喜一が愛知大学の創設者である。

太平洋戦争敗戦により書院は閉校となった。書院最後の学長である本間喜一は、帰国後東亜同文会の会長代理を訪ね、  
「東亜同文書院に代わるべき新大学の設立を東亜同文会として考慮していただきたい」と懇願した。

→『「東亜同文書院」「愛知大学」創成の軌跡』・1946に掲載

### 「大学史」を基軸にブランディング ②

「大学史」をとおして、創設時の環境下において「どのような背景で大学が創立され、今に至っているか」を理解し、さらに先輩方の実績を認識し、視野を広めることは、人間として成長に繋げられる。  
偏差値基準での入試結果による入学生は第一志望ではなく不本意入学の場合が多い。1年生の早い時期から「大学史」に関係する教育を施し、最終学歴校のブランドを学生に理解させ、自信をもたせることが必要である。

さらに卒業生には、長い人生のなかで「大学史」を含め母校を懐かしみ、母校への想いをもち続けてもらい、次の世代へ本学を紹介してもらいたい。（※継承の必要性）

### 「東亜同文書院」が本学のルーツ校 ②-2

東亜同文書院最後の学長・本間喜一が愛知大学の創設者である。

数日後「採用しないことに決定した」との回答に対し「教職員有志が相集って設立しても差し支えないか」と問い、「何等差し支えない。ある程度の援助を与えるにやぶさかでない」との回答を得て、愛知大学設立に向けて奮闘された。

→『「東亜同文書院」「愛知大学」創成の軌跡』・1946に掲載

### 東亜同文書院大学記念センターにおける 文部科学省の競争的資金の獲得

- ・情報公開と東亜同文書院をめぐる総合的研究  
2006年、  
文部科学省私立大学学術研究高度化推進事業  
(オープン・リサーチ・センター整備事業/5年間)
- ・東亜同文書院を軸とした近代日中関係史の新たな構築  
2012年、  
文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業  
(研究拠点を形成する研究/5年間)

### 「愛知大学」の創立に向けて ①

『愛知大学の十年のあゆみ』(1956年)より抜粋

本間喜一、小岩井淨の両氏は、1946(昭和21)年5月30日に東京九段下の若宮旅館にて東亜同文書院の教職員を招集。神谷龍男、木田弥三旺等13名が参加し、新大学設立と9月開校目標が決議された。大学設置場所は、久留米市・別府市・豊橋市・半田市・鎌倉市などが候補地となり、「大学将来の発展」を見据えて慎重に検討された。

→『「東亜同文書院」「愛知大学」創成の軌跡』・1946に掲載



## 「愛知大学」の創立に向けて ②

『愛知大学の十年のあゆみ』(1956年)より抜粋

中部日本には法文系大学はなく、構想如何によつては全国的大学として優秀な学生を集めることができる、との見地に立ち、さらに軍関係の建物の借入が有望であること、**甘藷の大量生産地**であり2~3千名に及ぶ学生への食糧に不安がないことから、豊橋市を最適地として決定。大学名は「**智を愛するものが集う**」との意味を含んだ「**愛知大学**」に決まった。

→『「東亜同文書院」「愛知大学」創成の軌跡』・1946に掲載

## 「愛知大学」の創立費及び供託金収支予算表

### □ 1946(昭和21)年

収入の部		支出の部	
豊橋市寄附金	50万円	予科開設費	21.5万円
日本農産科学研究所	20万円	学部開設準備費	28.5万円
富田実平氏寄附金	30万円	供託金	50万円
合計	100万円	合計	100万円

### □ 1947年(昭和22)年

収入の部		支出の部	
授業料	33.6万円(一人700円×480人分)		
入学金	1.44万円(一人30円×480人分)		
証明、利息その他雑収入	1.6万円		
助成金	10万円(豊橋市より経常費の補助)	合計	46.64万円
支出の部			
人件費	30.12万円(年額/学費1.2万円、予科教授0.96万円)		
物件費	16.52万円	合計	46.64万円

## 「大学記念館」①

大学記念館の建物ルーツは110年前の1908(明治41)年まで遡る。当初は旧陸軍第15師団司令部からスタートし、次いで陸軍教導学校本部、さらに陸軍予備士官学校本部、そして戦後の愛知大学本館へと変遷してきた。

その本館は建物の価値が評価され、1998(平成10)年に文化庁により登録有形文化財に指定された。これを機に「大学記念館」と改名され、博物館相当施設として、愛知大学とルーツ校・東亜同文書院に係る資料、コレクションを展示し、その業務を記念センターが担っている。

## 「大学記念館」来館者①

2017年度 5,163名

国立歴史民俗博物館(1名) 大阪教育大学(1名) 大阪大学(2名) 目白大学(4名) 筑波大学(1名) 早稲田大学(1名) 目白大学(4名) 神奈川大学(1名) マレーシア学生豊橋スタディツアー(15名) 南開大学(6名) 時習館高校(1名) 時習館高校(6名) 美和高校保護者(30名) 豊橋東高校(1名) 藤ノ花高校(1名) 御津高校(1名) 精華学園高等学校(13名) 東栄町教育委員会(2名) 湖西市役所企画部(6名) 高山市役所(1名) 新城市役所(4名) 山形県川西町生涯学習課(2名) 山形県川西町まちづくり課地域振興グループ(2名) 奥三河ビジョンフォーラム(2名) 豊橋ユネスコ協会(6名) 朝日新聞(1名) 中日新聞豊橋総局(1名) 東愛知新聞社(1名)

ほか

## 「愛知大学」の創立と建学の精神 ①

愛知大学は、太平洋戦争終戦の翌年1946(昭和21)年11月15日、6大都市以外では初めて旧制大学として愛知県豊橋市に49番目に設立した。

愛知大学の建学の精神には、「世界文化と平和への貢献」「国際的教養と視野をもった人材の育成」「地域社会への貢献」が掲げられた。そこには戦争への反省と民主主義への希求、そして、国際社会と地域社会への発展に寄与するグローバルな資質を備えた人材を育てる、決意が込められている。

## 「大学記念館」来館者②

2016年度 4,070名

広島大学(1名) 創価大学副学長(1名) 一橋大学(7名) ルーミニアの大学(1名) レシーナ大学(カナダ) 中山学術文化基金会(2名) 北京大学(2名) 清華大学(1名) 北京師範大学(1名) 復旦大学(1名) 中国労働関係学院(北京市)の学生・教職員(26名) 碧南高校(33名) 豊橋商業高校(11名) 時習館高校SGH歴史部(8名) 精華学園高等学校(3名) 新城市役所(2名) 豊橋市文化市民部市民協働推進課(6名) 豊橋市長中部経済産業局長 名古屋スリパチ学会(30名) 豊橋北ロータリークラブ(41名) シルバーカレッジ 豊橋歴史探訪近代化遺産めぐり(25名) 豊橋南部地区市民館市民講座 名古屋図書館サポーター「トッポ」

中京テレビ(2名)

ほか

## 「愛知大学」の創立と建学の精神 ②

戦後の苦難のなか、東亜同文書院大学ほか外地校から引揚げた教員が中心となって設立した本学ならではの、

グローバル社会が成熟し、地方創生が推奨される現代においても、72年前に掲げられた精神は、響き通じるものがある。



2018.8.28 事務職員全体研修会  
豊橋研究支援課長 田辺 謙巳

## 『「東亜同文書院」「愛知大学」創成の軌跡』 ～19 世紀以降、将来を見据えて始動した日本のグローバル教育の変遷～ (文責 藤田佳久名誉教授／パンフレットより抜粋)



上海外灘 (バンド)

めさせ、アメリカも追随しました。イギリス「租界」とアメリカ「租界」は 1863 年に「共同租界」へと展開し、さらに 1894 年には日清戦争に勝利した日本もこの「共同租界」へ進出しました。

こうしてイギリスとフランス、さらにアメリカの「租界」が設けられた上海は、欧米の清国に対する貿易拠点となり、そして鎖国中の日本の近海へも出沒するようになりました。幕府は警戒し、開国の是非で国内が割れることとなります。そこで幕府はついに長年の鎖国政策を転換し、幕末に各藩の藩士を集め、オランダ、イギリスを介して上海への貿易と外交勢力の実情調査のため「千歳丸」を上海へ派遣します。室町時代以降の初の貿易の試みでしたが、うまくはいかず、その後、4 回派遣をして上海の調査をしています。幕末に長州藩や薩摩藩はイギリスと戦い敗北を経験したことにより、近代化された武器の威力を知り得ました。そこで、上海を舞台にイギリスやフランスと武器の密貿易を行い、藩の強化を図り、それが倒幕の明治維新につながりました。

### 1. 東アジアへの窓口になった上海

19 世紀に入ると世界の海を征し、東インド会社を核として東アジアへ進出したイギリスは、清国からの茶の輸入を増大させ、その輸入超過の見返りにアヘンを清国に浸透させるようになりました。それを警戒した清国は林則徐を対抗させ、イギリスとアヘン戦争 (1840～42) になりました。武力に長じていたイギリスはこのアヘン戦争に勝利すると、清国との間に南京条約を結び、5 つの港を国外へ開放することになり、上海はその開港の一つとなりました。すぐにイギリスは上海の北側にイギリス専管の「租界」を設けました。これが上海の国際化への幕開けとなります。すると、それを見たフランスも清国と交渉し、フランス「租界」を認

## 2. 上海での国際商人・岸田吟香と荒尾精

日本にとって上海は、前述 1 の経過から、鎖国時代の長崎と同じように新生日本の外国への窓口になりました。

そんな中、幕末にヘボンにつれられ和英辞書『和英語林集成』の印刷のために上海を訪れた岸田吟香は、短期間ながら持前の竹画を通じて上海の文化人や商人達との交流を行い、文字通り民間外交のパイオニアになりました。岸田吟香はヘボンの目薬処方を習得し、帰国した東京、そして再び訪れた上海に「楽善堂」を開店し、目薬を販売して大きな成功を収め、日本人として初の国際商人といえるほどの存在になりました。さらに日本では初の新聞社の立ち上げや記者、船会社、印刷出版、石油採掘、社会事業と多岐な事業家にもなり、息子の岸田劉生は「麗子(れいこ)像」で有名です。



岸田吟香

なお、この岸田劉生の弟子である愛知県豊橋市・豊川堂書店の高須光治は戦後「愛知大学」のロゴを創案し、愛知大学の校旗や校章に使われています。この岸田吟香を上海滞在中に訪ね、日清提携への活動について教えを請うたのが荒尾精でした。



愛知大学校章

彼は明治維新後、父の士族失業により名古屋から上京したものの、父親の商売失敗とその後両親を亡くしたことにより、荒尾は書生として近くの警察署長宅に寄宿することになりました。そこで彼は折からの朝鮮とその背後にいた清国の存在などアジア情報に関心を抱くことになったのです。

清国への多大な関心は、陸軍士官学校卒業後には清国を実際に訪れたいとの夢に変わります。荒尾は清国が西欧に侵食されていて、それが日本へも及ぶのではないかと危惧し、陸軍士官学校時代に日本は清国と貿易を進めることで経済力をつけ、清国とともに西欧列強に対する抵抗力を持てるという構想を持ったのです。士官学校時代の親友根津一は荒尾のこの構想に強く惹かれ、両人は意気投合。根津はそのあと荒尾をずっと支えることになります。

## 3. 荒尾精が開いた私塾

岸田吟香は荒尾のこの日清提携構想（上段 2 記載）と清国の実情を知りたいという強い熱意を受け、清国中央部の漢口（現在の武漢）に楽善堂の支店を設け、荒尾に支店長を任じ目薬と本屋を開きながら、中国の実態に触れられるように援助したのです。そんな時期、日本の東北地方での戊辰戦争や九州での西南戦争で官軍に敗れ、政府から見放されたと感じ、清国へ渡った若者たちがいました。荒尾は彼らを集めて清国を知る私塾的な会をつくり勉強させ、各地を巡らせたのです。清国は広大なため勉強はそう簡単ではなく、塾生達の多くは清国各地への調査中に行方不明や殺されるという痛ましい事例もあり、荒尾は心を痛めました。こうして約 3 年間、清国への理解を深め、



その成果を親友の根津一にまとめさせ、『清国通商綜覧』として1892年に刊行（丸善）したのです。日本人にとって漢詩・漢文の世界ではなく、現実の清国を知ることができる初めての刊行物であったため、ベストセラーになりました。



荒尾精

#### 4. 荒尾精の日清貿易研究所

荒尾精は、清国での活動から本格的な貿易実務者を養成するビジネス学校が必要だと痛感し（前述3記載）、帰国後はその学校設立に奔走します。場所は国際ビジネス都市になっていた上海です。その際、資金確保が特に重要で、それについては日本政府が保証してくれたため学校名を「日清貿易研究所」とし、日本全国で学生募集を実施し、150人が集まりました。こうして軌道に乗ったかにみえた新たなビジネス学校でしたが、支持してくれた日本政府の内閣が変わったことにより、政府の保証を失いました。荒尾は窮地に陥入るものの、何とか劇的な対処をし、1890年開校にこぎつけました。清語学（中国語）、英語学、商業地理、支那商業史、経済学等の実業科目を揃えました。しかし資金不足もあり、学生の半数近くが退学し、卒業者数は89名でした。しかも卒

業直後、日清戦争が起り、清国語のできる卒業生の半分は通訳で従軍させられ、多くが戦死しました。荒尾のショックは大きく、彼らの死を弔うため、京都の東山に隠棲してしまうほどでした。しかし、研究所に学んだ白岩竜平らは汽船会社を立ち上げるなど、日清間をつなぐ役割を果たす人材となりました。

そんな経緯の中、荒尾は戦後、あらためて本格的なビジネススクールとなる、のちの「東亜同文書院」構想を描くのです。

#### 5. 近衛篤磨と「南京同文書院」、「東京同文書院」

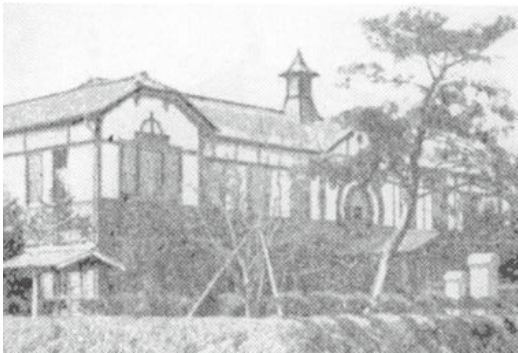
その一方、貴族であって開明的で行動的な近衛篤磨の登場がありました。近衛は明治維新で小学生時代に京都から東京へ移りますが、ほとんど独学で英語を家庭教師のもとで修得し、イギリスかアメリカへの留学を計画します。しかし、折からの自由民権運動に加担するのを恐れた日本政府の三条実美らに反対され、結局、プロシヤ（現ドイツ）、オーストリアへの留学に変更します。留学中、近衛は現地でドイツ語をマスターし、6年間でドイツ語の論文で学位をとり、すぐれたリーダーとしての地位を重ねます。

近衛は藩閥政治や軍人嫌いで、貴族こそがリーダーとして活躍すべきだと学習院長時には、その改革をすすめます。



近衛篤磨

そして2度目の外遊でアメリカ、ロシア、バルカン、プロシヤなどを辿り、西欧列強の東アジア戦略を知ります。そこでその帰路、清国へ立ち寄り劉坤一、張之洞ら指導者に会い、清国の教育レベルを上げることも西欧列強に対する抵抗力になると主張し、南京に日清学生が共学する「南京同文書院」開設への認可、協力を得ます。清国側からは即座に留学生の派遣計画も出され、近衛は帰国後の1899年に、清国留学生の受入学校として東京目白の自宅敷地に「東京同文書院」を開設します。



東京同文書院

## 6. 「東亜同文書院」の誕生と根津一

1900年、近衛は南京に日本人と清国人共学の「南京同文書院」を開学しましたが、その半年後、折からの義和団の乱が拡大し南京を攻める恐れが強くなったため、「租界」のある上海へ移転します。そして、そこで前述した荒尾精が構想していた新たなビジネ



東亜同文書院

ス学校案と合体し、1901年上海南郊の高昌廟に「東亜同文書院」を誕生したのです。

なお、前述のような動きの背後で、日清戦争後、従来の欧米指向でなく、アジアへ目を向けるいくつかの組織が生まれます。そのうちの2大組織で、犬養毅らの「東亜会」と近衛が代表する「同文会」が合体し、「東亜同文会」が誕生します。そして同文会会長であった近衛篤磨が新組織の会長になります。その主旨は東亜会がもっていた政治的匂いを弱め、日清間の教育文化事業に重点を置き、「東亜同文書院」の学校経営や大陸での各学校、新聞社への支援や出版事業を行うなど東アジアの共存を目指す強力な組織となります。

## 7. 東亜同文書院「愛知大学」誕生へ

新生「東亜同文書院」は院長に根津一が就任し、根津は60歳過ぎまで書院の顔として教育に力を注ぎました。

「倫理」の授業を持ち、書院生に倫理感を具える実業家になるよう指導をしました。それは折しもヨーロッパでマックスウェーバーが論じた資本主義を包んだプロテスタンティズムの東洋版に匹敵するものでした。中国大陸や東南アジアなどで経営者や、実業家になった書院卒業生は、現地の人々に慕われ、太平洋戦争直後、引揚げの時に、彼らは大陸の従業員たちから惜しまれ、送別会を催されたそうです。



根津一

その背景には、書院生が在学最終年度に「大調査旅行」として徒歩中心で3～6カ月間貿易品調査、地域調査を行い、現地の人々とも親しく交流していたことがありました。「東亜同文書院」は1939年旧制大学へ昇格します。戦時色が深まる中、倫理感を持ち得るビジネスマンや実業家になるよう指導される伝統は継続されました。帰国後、その倫理感が日本の高度経済成長において大いに発揮されたという事実は、もっと知られるべきでしょう。

こうして荒尾精、近衛篤麿、根津一の3人の書院の「三先覚」「三聖人」は相互につながり、「日清貿易研究所」から「東亜同文書院」、そして「東亜同文書院大学」へ、と発展させてきたのです。しかし、荒尾精、近衛篤麿がそれぞれの役割を果たす途上で早逝したことにより、その後、日本が東アジア戦略の乱れを抑えられず悲劇をもたらした、ともいえるでしょう。